

# 1 アジアの戦争と北海道

## 木製戦闘機用に試作された主翼・補助燃料タンク

中央の天井からさがる翼(右主翼3分の2)と補助燃料タンクは、1943～44(昭和18～19)年に、北海道立工業試験場が試作した木製戦闘機の機体部分です。このころはアジア太平洋戦争の末期で、資源も乏しいなか、日本が戦争を続けようとした姿勢がうかがえます。

この戦争で、多くの人びとが傷つき、亡くなりました。日本が関わったアジア太平洋の地域、人びとについても想像しながら、この時代の移り変わりをご覧ください。

第一次世界大戦でヨーロッパの物流がとだえ、北海道の産物が世界に進出すると、貿易港の小樽は急成長しました。港では働く人びとによる労働組合などの活動もさかんになります。1927(昭和2)年、小樽の港などで続いたストライキには、全国から応援が寄せられました。作家の小林多喜二は、彼らの労働や生活を描きます。しかし、普通選挙のはじまりに合わせて治安維持法が定められ、特別高等警察がこうした運動を激しく弾圧して、戦争の時代へと向かっていきました。

日本は1931(昭和6)年に「満洲事変」を起こし、1937年には中国との全面戦争になります。前年の1936年には、二・二六事件が起こり、北海道では石狩平野などで陸軍の特別大演習が行われるなど、新たな戦争の兆しがありました。日中戦争が長びくなかで、1940年、国内では政党が解散し、大政翼賛会ができ、国民は隣組に組織されました。学校や職場、地域のすみずみまでが戦争一色になっていきます。

戦争は、東南アジア、西太平洋に広がり、複数国との大戦になりました。このころ、北海道からは多くの人びとが「満洲」へ送られ、道内の炭鉱や土木工事に朝鮮人が連れてこられました。アッツ島が陥落して、周辺では潜水艦による船舶被害が相次ぎます。1945(昭和20)年、沖縄が陥落すると、本州や北海道もアメリカ軍の空襲にさらされました。

1945(昭和20)年の敗戦により、戦地や占領地から多くの軍人や民間人が日本に引きあげてきて、食料が不足し、政府は再び北海道の開拓を進めました。戦争をせず戦力をもたないことを定めた新しい憲法ができ、多くの国民が歓迎しました。しかし、1950(昭和25)年に朝鮮戦争が起こると、日本に警察予備隊(のちの自衛隊)がつくられます。翌年、講和条約と同時に日米安全保障条約が結ばれ、アメリカ軍が日本に留まりました。アメリカとソ連が対立する東西冷戦のかけが日本を覆ったのです。



## 軍教事件・普通選挙と治安維持法

第一次世界大戦における被害の大きさから、軍縮や民主主義、共産主義の思想が世界に広がりました。日本でも労働運動や軍縮世論がさかんになり、普通選挙も実施されますが、治安維持法のもとで特別高等警察が共産主義者や労働者、学生の運動を激しく弾圧していきます。1925(大正14)年、小樽高等商業学校で行われた軍事教練が問題となり、学生は「全国の学生諸君に檄す」と反対をよびかけました。



## 日米安保と恵庭・長沼・矢臼別

東西冷戦のかけが日本を覆うなか、北海道と沖縄は、アジアの冷戦の最前線の役割を負わされました。米軍や自衛隊の基地、演習場の周辺では住民の反対が起こり、1960(昭和35)年には日米安全保障条約の破棄を求める運動が全国に広がりました。北海道でも、恵庭や長沼の裁判では自衛隊と憲法が争点となり、矢臼別では現在も実弾演習が問題を投げかけています。